

## 神奈川県に野生化したホソオチョウ

原 聖 樹

Establishment of *Sericinus montela* in Kanagawa Prefecture

Seiki HARA

ホソオチョウ *Sericinus montela* GRAY は 1 属 (ホソオチョウ属) 1 種を構成する小形のアゲハである (アゲハチョウ科, ウスバシロチョウ亜科, ギフチョウ族)。

中国大陸や朝鮮半島にしか分布しないはずのホソオチョウが最近あいついで東京近郊で採集され, 新聞・テレビでも報道されて, 一時期話題になった。

最初の記録が日野市百草園から出たのは1978年のこと。それ以前にもこの付近で, 1958年頃と1970年代に散発的な記録が若干あるらしいが, 詳細は不明。1979年以降今日までに, 陣馬高原・小津・元八王子・宮ノ下~カ石 (以上, 八王子市) や山梨県の大月市浅川・北都留郡上野原町 (2カ所) 等, 多摩川, 相模川 (桂川) 水系から続々と発見され, 一方では都心の代々木公園 (?) ・東京大学構内にも発生した。

成虫の色彩斑紋が韓国産亜種 *ssp. koreanus* FIXSEN に酷似している点と, 幼虫の光周反応の面で, あるいはまた, 発生期がだらつきその土地の環境にまだ十分なじんでないと考えられることなどから, 「韓国から日本に持ち込まれて放蝶されたものが一時的に土着した」といわれている。前述の記録地の中には, 二次あるいは三次的な放蝶による場所も含まれているのであろう。

ところで, ホソオチョウは神奈川県からも見出された。1980年に, 津久井郡藤野町から記録されたのである。そして, 1982年以降には, 多くの人々が藤野町にこのチョウを求めて到来するようになった。同町では佐野川地籍の上岩と下岩に発生地がある。他に, 同町吉野の沢井でも採集されているが, くわしい場所は筆者は知らない。

藤野町は古くからキマダラルリツバメ・ハヤシミドリシジミ・ウスイロオナガシジミの産地として著名で, 例年シーズンには採集者が入る。ホソオチョウの

発生地もこれらの蝶類の生息圏内にあるため, 仮にこのチョウが昔から土着していたものであるとしたら, こうした大勢の人々に看過され続けるはずはない。目につきやすく, 繁殖力も旺盛なチョウなのである。また, かつて筆者も職務の関係で十数年間, 発生地の周辺をシーズン中にもひんぱんに通っているが, このチョウに出会ったことはなかった。このような点からみても, 藤野町のホソオチョウは何者かによって秘密裡に放蝶されたものであるとしか考えようがない。

当地のホソオチョウに標本としての学術的な価値はほとんどないけれども, その生態を知るという意味では, 放蝶地は格好なゲレンデといえる。ここまで発生が続いてきたのだから, 「神奈川では, 採るだけで誰も調べる人がいないうちに絶滅させてしまった」ということになっても困ると思う。ひととおりのチョウの生活を調べておくことが必要だ。類例のない特異な放蝶事件を記録にとどめる点からも……。

さて, まえおきが長くなったが, 1983年夏~秋期の延11回にわたる現地観察をもとに, 以下に下岩のホソオチョウについて述べる。まだ調査を継続中の段階なので, 詳細な報告は別の機会にゆづるとして, 今回はとりあえず現時点の概要を紹介するにとどめたい。

なお, 1982年の夏から83年春期にかけての実態について津久井郡農協の亀山寿俊氏から情報提供を受けているので, この点も補足として本文に加える。

### 生息環境

発生地は部落外れの山間傾斜地で, 耕地と山林の境い目にある。南北を沢にはさまれた山腹上に位置しており, 周囲にはアカマツを混じた雑木林, スギ植林, あるいは伐採されて縮小したカシワ林が見られる。発生地の面積は数十m四方と, きわめて狭い。

畑の土手・休耕地・墓地・茶畑・ヒノキ植林・クリ

林の中や、通路・野菜畑・桑園の周縁部に食草のウマノズクサ（ウマノズクサ科）が自生している。樹令数年～10年位のヒノキ植林では林床の食草が樹幹や枝にからみついでおり、また手入れのゆきとどいた茶畑では、繁茂した葉のすき間から食草が顔をのぞかせている。

同地には、同じウマノズクサを食草とするジャコウアゲハは見られず、ホソオチョウがこの種と競争することはない。ジャコウは食草オオバウマノズクサの普遍的な分布にささえられて津久井郡内各地に普通に分布している（ホソオはオオバをまったく食べない）。

## 生 態

成虫は4月末から9月の半ばまで見られる。この間多少の波はあってもほとんど切れ目なく発生が続くので、正確な回数にはつかみがたいが、年3回ないし4回発生すると考えられる。春・夏両フォームの季節型があり、越冬態は蛹。

8月下旬に5令幼虫（終令）を採集して飼育すると、その大半が越冬蛹になるが、一部は9月に春型を生じる。

卵は食草のあらゆる部位に産付される。食草に接する他草本に卵が付着することもある。卵塊を形成するが、ときに1卵の場合もある。卵塊中の卵数はばらつきが多く一定しない（数十卵のものが多い）。

孵化率は90%以上。1～2令は集団で群生し、以後幼虫はしだいに分散する。ただし、この群居性は5令まで失われず、令期のことなるものどうしが少数で体を寄せ合って食草上に休止しているケースがけっこう多く目につく。食草のほか、その近くの雑草上で眠りしたり、休止したりする。挙動はやや活発、わずかな刺激で幼虫は地上に落下する。

孵化は食草の葉裏や、ヒノキ樹幹（地上高数十cmの部位）、ハルジオンの葉裏、地表すれすれのススキ葉裏などで確認しているだけで、蛹は見つけにくい。下草に被覆された地表部で蛹化するケースが多いと推定される。

天敵としては、成虫でクモ2種・アブ1種を確認。何物かに上半身をかみくだかれた瀕死の5令幼虫や、病死したと思われる幼虫を見たこともある。

成虫の飛翔はかんまん。飛翔範囲は狭く、発生地を離れた個体を見たことがない。晴天時にさかんに飛翔するが、高温時には曇天でも飛ぶ。強風時にはほとんど

ど自翔しない。ハルジオン・ヒメジヨオンなどの花蜜を求める。下草や樹梢に翅を開いて休止することも多い。雨天や夕刻時には、草本や樹木の葉に翅を閉じて休止している。

♂の探雌飛翔は長時間にわたり、このようなときなかなか静止するそぶりを見せずに、狭い場所を行き来する。

## 迫害されるチョウと食草

5月から9月にかけて採集者がひっきりなしに訪れ、チョウと食草を持ち去る。

夏期にヒノキ林の約半分が枝打ちされ、樹幹からんだ食草も取り除かれた。林床の下草刈りが実施され、卵・幼虫と食草が一時的に大きな打撃をおもった。また、農家が墓地・畑の土手・茶畑に生えた食草を刈り取ったり、あるいは除草剤・殺虫剤（茶の消毒）を散布したりしている。

しかし、いずれの場合も、食草は新芽を再生させて半月後にはもとに近い状態にまで回復している。食草は農家泣かせの雑草である。

こうした雑草退治は部分的で、採集の場合とことなり、同時期に発生地の全域におよぶことはない。

## 適度の人手は必要か？

繁殖力旺盛。草にたとえればまさに雑草なみ。1♀が二百数十卵もの卵を産む。1回の産卵で1時間以上かけて百数十卵の卵塊を産むこともある。しかも、近親交配の悪影響も少ない。一世代に要する時間は短かく、夏期で25日程度。

このペースで増殖したら、いかに再生力の強い食草といえども、たちまち食いつくされてダウンしそうだ。チョウが生き残るためには、多少の間引きが必要と考えられる。採集されたり、除草のそば杖をくって食草が痛めつけられるなど、適当に人手が加わっていることが、おそらくチョウの繁殖にとって有利に作用しているのだろう。いったん飼育したものを再び現地へもどす、といったことも行われているらしい。

除草の手が入らなると、陽地に生育している食草はススキ・クズ・タデ・アズマネザサ等に埋没して、その勢力を減退させてしまう。林内なら、ヒノキなどからみついで上方へ伸長することもできようが…。

チョウおよび食草の受難がかえって両者の繁栄に不可欠なことであるとしたり、なんとも皮肉な話ということになろう。

## チョウの将来

発生がだらつき、シーズン中には常時、卵～成虫の全ステージが見られる。このことがさいわいして、猫の額ほどの土地でこのチョウは世代を継続させている。1度や2度の打撃は、チョウの全ステージに影響をおよぼすことはない。

①採集行為、②草刈り、③薬剤散布と、チョウは食草ぐるみで休む間もなく痛めつけられている。にもかかわらず、今のところチョウは絶滅の憂きめにあっていない。ただし、将来の保証はなく、①～③の組合せが悪くからみ合って作用したとき、チョウは壊滅状態に追い込まれざるをえないだろう。

また、ヒノキ植林が高冷化して林内照度が低下してくると、半陽半陰性の食草が林外へ追いやられるであろうと考えられる。現在、食草はヒノキ林内にも多

く、そこでのチョウの発生量も多い。

しだいに採集者間に知れわたるのか、ネットの来襲が絶えない。この情勢では、他の放蝶地と同様に、この地のチョウもやがて絶滅に追いやられる運命にあるのだろう。集中的な採集行為によって日野・八王子各市の発生地はすでに壊滅した、といわれている。近くに好条件の場があってそこにでも飛火しないかぎり、いずれにせよ同地のチョウの前途に明るい見通しはないのである。

本稿の執筆をおすすめ下さった新井一政氏並びに写真作成をいただいた井上久美子氏、情報提供を受けた亀山寿俊氏の方々に、末筆ながら深謝したい。

(神奈川県蚕業センター)

## 図1の説明

いずれも、自然状態で筆者撮影。16・21のみ1982年、他はすべて1983年

1. 生息環境（9月17日）
2. 食草の茎・葉に産付された卵（7月9日）
3. 葉裏の卵塊（8月6日）
4. 葉裏・茎上に群居する1令幼虫（7月2日）
5. 摂食中の3令幼虫（9月9日）
6. 枯ススキ上の2令・4令幼虫（9月17日）
7. 葉裏の4眠中および4眠起直後（5令）幼虫・脱皮殻（7月24日）
8. 摂食中の3令・4令幼虫（9月17日）
9. ススキ葉裏で4眠起した5令幼虫と脱皮殻（8月27日）
10. 何物かに上半身をかみくだかれて苦悶する5令幼虫（7月24日）
11. ハルジオン葉裏の前蛹（7月16日）
12. ヒノキ樹幹の蛹殻（9月9日）
13. ススキ葉裏の蛹殻（8月27日）
14. いかく動作をする羽化直後の♀（13の蛹殻から出た個体）
15. クワの葉裏で睡眠中の♂（8月27日）
16. 交尾（7月24日）
17. 産卵（7月2日）
18. 下草に休止する♂（7月24日）
19. ハルジオン上でクサグモの1種に捕えられた羽化中の♀（7月16日）
20. 葉にひっかかって緑色のクモに捕食された♂（8月27日）
21. アブに抱えられた♂（7月24日）
22. 食草葉裏に産付された正体不明の黄色卵（9月17日）





